

令和5年度 池田町総合教育会議の概要

日 時	令和6年2月28日（水）	午前10時～11時40分
場 所	北安曇郡池田町大字池田3203-6 池田町役場 三階 協議会室	
出 席 者		
町 長	甕町長	
委 員	山崎教育長、小澤教育長職務代理者、森泉委員、後藤委員、小林委員	
欠席委員	無	
事 務 局	学校保育課長、生涯学習課長、学校保育課長補佐	
書 記	学校保育課長補佐	
傍 聴 人	3人	

1 町長挨拶

教育大綱の進捗状況、現在の保育園や小中学校の様子をお聞きし、情報共有をしながら意見交換をさせて頂きたい。

2 協議事項

(1) 今後の教育に関する施策内容について

① 町長より来年度教育に関する施策で計画している内容を説明。

- ・給食費保護者負担軽減のための町負担金増額について
- ・保育園給食材料費増額について
- ・町バス高校生以下無料化について

② 課長より、その他教育に関する令和5年度3月補正及び令和6年度の人事配置及び予算に関する特記事項について説明

A 令和5年度3月補正

- ・学校施設、教員住宅修繕

B 令和6年度人事配置

- ・小中学校、中間教室への配置状況、待遇改善

C 令和6年度小中学校総合活動予算増額

D 生涯学習課関係

- ・施設改修、図書館システム更新、文化芸術振興報奨金新設

(森泉委員) 町長のお話にあった給食費保護者負担軽減について、保護者の経済的負担軽減となるし、貧困が深刻な状況である今の時代に合った良い政策である。成長期にバランスの取れた栄養価が高いものを食べるということはとても大事であるし、給食は町を始め生産者、栄養士、など多くの人が良い食事を子ども達に提供したいとの思いがあり

作られる物なので、無償化を早く進めて欲しい。

(町長)早く進めたいと思っている。また有機食材について、米は既に導入しているが、他の食材について費用や食材が不揃いになりがちであるとの課題があり難しい。認定こども園からまず少しずつ取り入れられるように進めたい。

(森泉委員)町の負担率が小学校と中学校で異なるのは何故か。

(町長)より多くの食材を使い給食の内容を充実するよう工夫を図る点と、物価高騰により令和6年度の一人あたりの給食費単価が上がる。1食あたりの量が小学生と中学生では異なり単価も違うので負担率も異なってくる。

(後藤委員)かえで広場への遊具設置の進捗状況を教えて欲しい。

(下條生涯学習課長)令和4年度予算として、複合遊具と四阿^{あずまや}を設置するよう令和3年度3月議会定例会に上程したが、議会より財政困難な今の時期に必要な事業か。最低限の予算でできる方法を検討すべきであるとの意見が出され、予算からこの事業を取り下げることになった。

設置は複合施設の周囲に小さい子のための遊具、年配の方向けに健康器具を設置し、

四阿^{あずまや}もある程度大きい物を設置する案であった。今後ぜひ実現させたい。

(後藤委員)町民や子どもの保護者からの要望も多いので、早急に設置をして頂きたい。

(教育長)三校PTAからの要望(小中学校保護者から町、教育委員会への要望をまとめたもの)にもこの件は入っていた。

(2)第2次教育大綱について

①策定から現在までの5年間の成果

(小澤職務代理者)自分は策定に加った一人である。策定時多くの方と協議をし作り上げていったが、その過程の中で教育大綱が自分の中でこれからの教育のあり方や指針を考える拠り所となっていた。

成果について、キャッチフレーズの『こどもがまん中』という言葉がいろいろな所で子ども達からも口に出されるほど浸透していったことが一つある。

また保小中合同研修会が何回か行われてきているが、その研修時ある先生が、こどもをまん中に教育を進めるという意識が、それぞれの先生方が口にはしなくても暗黙の了解として背景にあることを感じるとおっしゃっていた。そのような先生方の意識も大きな成果の一つである。その意識の変化により授業の進め方を変えるよう大きく舵を切る事が出来たと強く感じている。

また保小中が繋がっているという感覚が強く生まれてきたと思う。保小中合同研修会でも沢山の先生が語られているが、中学校の先生が保育園や小学校でどのように育てられているか今までの過程を思い、逆に保育園の先生がこの子をどのように育てていきたいかを小学校、中学校の期間も含めた長いスタンスで考えていくという思いを持つことが出来るようになった。それにより子ども達にとって良い教育的環境が作られつつある

のだと感じる。

その研修会講師である村瀬先生は、当初これからの授業は考える子ども達を育てて欲しい、育てるよう考えて欲しいとおっしゃっていたが、第2次教育大綱開始後5年目である本年度の指導で、保小中15年プランの最終年にあたる高瀬中学校3年生について、考える子ども達になっていますね、とお話頂いた。

実際に子ども達へのアンケート結果によると、小学校から楽しいと答える割合が高くなってきている上、村瀬先生からは、「考える子というのはイコール優しい子でもあるんですね。」とお言葉を頂いた。それは目指していくインクルーシブ教育に繋がっていくと思うし、子ども達の暮らしの中にも大きな成果があったと思う。

(森泉委員) 私も第2次教育大綱の策定に携わったが、改めて『教育とは』『子育てとは』と考える機会になった。先ほど小澤職務代理者の話にもあったが、『こどもがまん中』というフレーズについて、指示する委員の方もあったが、私自身はどのように考えれば良いのか、というのが最初の印象であった。

子どもをまん中にした大人の社会、また町が子ども囲むという表現が子ども一人ひとりの主体性を考えた時に逆行しているのではないかと思ったり、教育大綱は子どもだけでは無く町民全体に関わるものだと考えた時に、もっと別な表現があるのではないか、と思った。

改めて教育大綱の理念やこのキャッチフレーズについて考えると、町民に広く伝わったのではないかと感じる。私自身もう一度このフレーズが示す意味を理解したいと思うし、改定の機会にもう一度考えて共有することが良いのではないかと。

このキャッチフレーズにより町は子どもだけを大事にするのかと受け取られてしまい、ご意見を聞くことがある。また子どもは保護し支援していくべきで、子どもに関する課題がある場合、何よりも優先して取り組むべきだ、とお聞きする。

私自身は子どもをまん中にした町づくりをしていくという考え方を持っていて、子どもを中心に全ての町民が関わって町づくりを行うという視点を持てれば良いと思う。子どもを町全体で育てるという意識を持ち、コミュニティを作るのだという意識を共有したい。

子どもは子育てに関わる人と人の間で育つと考え、子どものことを私達自身のことだと捉え、考えて行かれば良いと思う。

(小澤職務代理者) 「こどもがまん中」というキャッチフレーズをどのように考えるかということは、課題ともなる。子どもを大切にしていこうというその受けとめ方が、それぞれその方の持っている背景により温度差がある。子ども達というより教職員を含めた大人が、どう共有していくかが課題ではないか。

(後藤委員) 私も第2次教育大綱の策定に関わった一人であるが、町の子ども達がどのようになって欲しいという理想像を描いたものになっていった。策定後キャッチフレー

ズも含め他の市町村が参考にするほどであった。それは大きな一つの成果である。またコロナ禍もあり、現場の先生方が努力され、授業が変わった。一人一台端末を使って今までの黒板に向かうだけの授業では無く、子ども達自身が教え合うようになっていった。

運動会も決められた種目を行うだけだったのが、自分達が種目を決めて取り組むように変わった。進行も同様で、運動会、音楽会等自ら企画し進める姿が見られ、それも第2次教育大綱の成果の一つであると思う。

(小林委員) 私は第2次教育大綱以前の様子が良くわからないが、先生方の話をお聞きする中で、保小中の先生方のつながりが良くなった点とICT教育が非常に進んだという点が挙げられる。

(町長) 町の教育をどうすべきか考える中でニュージーランドの教育を学んだ。小学校から自分の意見を徹底的に出すという話を聞き、日本の教育との違いをまざまざと感じて、参考にして教育大綱策定を進めていった。先ほどから話にも出ているように主体性や自主性を伸ばし自分の考えをしっかりと伝える子どもを育てるということをこの教育大綱は目指しているのだと思う。

第2次教育大綱策定後中学校に行った時に1人の生徒が質問を出した際、多くの生徒達が手を挙げて積極的に発言する姿を見学させて頂いた。自主性や主体性が育まれてきたのだと感じた。

(教育長) 私は第2次教育大綱策定後教育長に就任した。(成果として) 感じた事の一つに、小中学校3校とも学校目標の冒頭が「自ら」となっており、教育大綱を意識して学校づくりを行っていると思う。また保育園、小中学校とも保育・教育内容を変更しようと園長・校長がリーダーシップを取り努力され、職員も同様の意識で進めている。

例えば音楽会に向け練習をどのように進めてきたか聞いたところ、音楽の先生が前に立つのでは無く、6年生のリーダーが前につき、自分達はこういう合唱を作ろうと全校に呼びかけ、作り上げていったと聞いた。子ども達が前のめりになって歌っている姿、それはまさに主体的に練習してきたからこそ生まれた姿である。教師が大きな声で歌おう呼びかけなくても、子ども達は自ら歌おうとするんだな、とその姿を見てとても嬉しく感じた。

(森泉委員) 今お話しされたように運動会や音楽会で子ども達の主体性を感じる場が多くあった。子ども達が運動会の種目を教師や保護者と交渉して主体性を持って決めていったという話を聞き、このような経験で自分達の声が未来を作っていくのだと感じ、一人の市民としての意識が育っていくのではないかと思う。

ただ、このような子ども主体の運動会の様子に地域や保護者が慣れていないと感じる。そのため、保育園、学校及び教育委員会からも子ども達がこのように変わっていきっているのだという事を地域に発信して行って欲しい。

(教育長) 教育委員はコミュニティ・スクールの協議会委員にもなって頂いている。コミュニティ・スクールは今年度より国型に完全に移行し3つの協議会に分かれて動き始めた。地域とともにある学校づくりを進めていくが、コミュニティ・スクールの面からの成果と課題を出して頂きたい。

(小澤職務代理者) 私は主に高瀬中コミュニティ・スクールに携わっているが、コーデ

イネーターの方から、自分の存在が学校の教職員に認知されるようになって、逆に声がかかるようになったと聞いた。学校からの希望によりボランティアとして関わって下さる方が増えたという事にも表れていると思う。まだまだ発展途上ではあるが、私は実際に学校の中に入り子ども達の活動や授業を見て頂くことが一つの説得力になると思う。また森泉委員の言われた発信をしていくということがもう一つの柱になると思う。

協議会では委員の方から参観日等のご案内を頂いても都合が合わず様子をなかなか見に行かれないという反省が出されていたが、学校からはいつでも参観にいらしてくださいと言われていたので、町の方が学校に来る機会、音楽会等の行事や授業の様子を見て頂くことが増えれば、ご自身で子ども達の変化を感じて頂けると思うしそう願っている。

まだ(町の)コミュニティ・スクールが始まったばかりなので、先ほどのコーディネーターの認知度が高まっていることやその呼びかけに学校に関わる人が増えていくことがとても有難く感じる。

また、コミュニティ・スクールでは学校は支援してもらえばかりでは無いと教育長さんが良くおっしゃっているが、その点を詳しくお聞きしたい。

(教育長)今まではコミュニティ・スクールの活動は地域の方が学校の支援をして頂くという概念があった。地域の方の支援は高瀬中では本年度63人のボランティア登録があり有難い。

今後のコミュニティ・スクールは、地域が学校を支えるだけではなく、学校から地域に働きかけていくことが重要である。それが地域とともにある学校づくりの姿である。

学校として地域に何が出来るか考えて欲しいということは、校長に話をしている。例えば本年度の中学校3年生が総合的な学習の発表をした。その学年は2年の間町の魅力アップのために学習を続けて来られた。その結果商店とタイアップして商品を作ったり、町を元気にするにはこのようにすれば良いと具体的に提案がされた。それが学校から地域に働きかける一つの姿ではないかと思う。

今までの総合的な学習は調べ学習だけに終わりがちだったところ、本年度の3年生は調べた上自分達には何が出来るか、と一歩踏み出すことが出来た。それも一つの成果であると思う。

(森泉委員)先日のコミュニティ・スクールの会議で、会染小からボランティア活動が進展したとの報告があり、参加した方からも子ども達との触れあいや行事等の参観で様子を見る事が出来て良かったとの声をお聞きし、嬉しく感じた。校長先生から、子ども達が普段から主体的に学んでいる事が行事での姿に繋がっているとお聞きし、その事も大変嬉しく思う。

ボランティア活動を考えると、地域で高齢化が進み、自治体活動も弱体化しつつあり活動が危ぶまれる中地域の方に負担がかかるのでは無いかと心配している。そんな中で保護者もボランティア活動に参加しているとお聞きし良かったと思う。

保護者や地域の方も多様であり、学校に好意的な方だけが関わるだけではいけないと思っていて、事務局からコミュニティ・スクールは参加から参画する形になったとお聞きし、様々な方々がそれぞれの異なる意見を出し合い進めていく事がとても大事だと感じる。自分が学校に勤めていた頃、ボランティアの方から一週間に一度活動をして頂いていたのだが、そのための調整や準備が大変で教員にとって負担だった。現在教員から

大変助かっていて感謝しているとお聞きしているが、負担がかからないように配慮して活動する事も大事だと考える。

(小澤職務代理者) 今のお話の中で、学校に好意的な人ばかりでは無いということがよくわからなかったがどういうことか。

(森泉委員) コーディネーターやボランティアの方々は子どもが好きで関わりたいと思っ
てくださるが、地域の方々のお考えは様々で自分の事だけで精一杯という方もいらっしゃる、皆様からボランティアに参加して頂く事は難しいと思われる。地域とともにある学校とはどのようにしていくべきなのか、と考えていきたい。

(小林委員) コミュニティ・スクールは草取りなど作業面が結構あるが、以前PTA活動
をする中で刈払機や軽トラが無いとか、資源回収でも子どもが居ない地域がある等活動する
のが困難になって来ていると感じていたので、地域の方より参加して頂く事はとても有
難い事だと感じている。また町の歴史、裁縫や書道等に精通している方がいらっしゃるの
で、先生や保護者では教えられないが子ども達が求めている部分を地域の方から教えて頂
いている事はとても素晴らしいと感じる。

また現在ボランティアを募集する際、三つの園小それぞれがバラバラに行っているが、
まとめて行った方が良いのではないかと感じている。

(教育長) ボランティアの募集について、宿題として考えていきたいと思う。

(町長) 今までの話をお聞きして、コミュニティ・スクールが先生や保護者では出来ない部
分を担って頂いているのだと感じた。今後この活動が深まり、歴史や町全体の事について
更に知識を得る事が出来るので無いかと思う。また教員経験者も多いため、子ども達をよ
り導いて下さるのでは無いかと感じている。

(教育長) 課題に目を向けると、今年度中間教室を立ち上げ、利用する子どもも増え良か
ったと思うが、全国的に不登校児童生徒数が過去最高を記録する中町も例外では無く多く
存在し、成果と課題を併せ持っていると思う。

また中学校部活動地域移行について、一部実現しているが、全体としてはまだ取り組み
途中であり、子ども達の活動の場を確保していくことが大きな課題である。実現に向け進
めていることは一つの成果である。

学校の授業とか行事についてはかなり(第2次教育大綱の)成果が出ているが、今後教
育大綱及び保小中 15 年プランをどんなふうに進めていくことがいいのか、ご意見をいた
だきたい。

(小林委員) 私が教育大綱を初めに知ったのは、PTAの役員をしていた4年程前である
が、そもそも教育大綱とはどのような物かわからず、深く理解するまでには至らなかった。

一般の方が理解するには難しいと感じる。『子どもがまんなか』というキャッチフレー
ズはよく知られるようになったが、その背景までは理解が進んでおらず、そこからイメ
ージすることを各自判断して使われているようなところがある。もっとわかりやすく、キャ
ッチフレーズをまん中にし、周りに図式化するように『子どもがまんなか』とはこういう
事だと説明をつければ、皆の共通認識になるのではないか。わかりやすいリーフレットを
作成すればどうか。

PTAでも子どものためにという言葉はよく使われるが、動員のために使われているよ
うに感じることもあり、それは本当に子どものためなのか、と疑問に思う事もある。PT

Aはその前に student のSを付けて、親、教師、子どもも含めた組織であって欲しいと思う。

現在『子どもがまんなか』という言葉の使われ方は地域や親からの見方になりがちで、子どもが求めるものとずれてしまうと、子どもにとって負担になってしまうと思う。全てでなくても良いが、子どもも含めた会議があっても良いと思う。

私が中学校PTAの役員をやっていた時に、学生の意見を聞いたかったがコロナ禍で実現出来なかった。バザーを行う際も、そこで得たお金は子ども達のために使うので、本人たちにも参加してもらおうと得るものが大きいと思ったが、実現出来なかった。(『子どもがまんなか』という事が) 周りからの一方通行にならなければ良いと思っている。

(森泉委員) 小林委員の意見に同感である。明治初期に日本を訪れたイギリスの女性旅行作家でイザベラ・バードという方があった。東北を旅した際、『貧しくも礼儀正しく、子どもを最優先に可愛がる。私は、これほど自分の子どもをかわいがる民族を見たことがない。』とおっしゃっていて、東北の村人は貧しく厳しい環境の中で子育てを中心において生活している。子どもが地域の活力となり地域の課題を突破し繋がりを強め、再興していく力になるのだと思った。大綱策定にあたり、『子どもがまんなか』というのはこういう事ではないかと考えさせされた。

不登校に話を移すと、人数が増えていてとても心配している。学校内や町の間教室等で居場所作りをしているが、不登校の原因は様々であるので、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど第三者に繋げて家族ごと支援していくことが重要で、その点にもっと力を入れて欲しいと思う。第三者が入ると支援がしやすくなるからである。また学習面での支援も大切で、保護者もとても心配している点でもあるので、オンラインで学習できる環境づくりを整え発信し続けて欲しいと思う。

(小澤職務代理者)「子どもがまんなか」のフレーズの受け止め方について、私は子どもを信じるということであると思う。中学生の成長や、小学生の子ども達が主体的に作り上げた音楽会や運動会を見ても、子ども達を放任するのではなく見守り任せる事こそが、力を引き出すのだと目の当たりにして来た。

私が最初にそれに気づかされたのは、山中で保育を行っている私立自然保育園で、自然の中で育っていく中友達に優しくしてあげるのだと言われている訳では無いのに、2歳の男の子が同年齢の女の子の荷物を自ら持ってあげる姿があったと聞いたことである。2歳で出来るのか、思った。また年長の教室を参観させて頂いた時に、グループ学習が出来ていた事にも驚かされた。課題に対してグループで話し合いをした際、それぞれ違う意見を出す事が出来、その上で子ども達は〇〇ちゃんと〇〇ちゃんは同じ意見だから一緒に発表しようと言が進んでいった。小学校での音楽会、中学校での様子を見ても、子ども達は大きな力を持っているので大人は力を生み出せるように見守りサポートしていくようになっていけば、それがもっとも大きな力を引き出すことになると思う。

先ほどニュージーランドの話が出たが、そこでの子育ての話をしてくださった方は、「最終的には子どもを信じるか信じないかです」とおっしゃっていた。自分も今そう思っている。子ども達の成長を促す際は見守り困った時にはサポートする大人が必要であるが、それは指示をするのではなく、どうしたいのか聞く事が子ども達への支援になり、それが小林委員の意見にもあった子どもも含めた会議等にもつながっていくのではないかと。

達が心を開いていけばとても大きな力を出すので、それが一つのチャンスでありきっかけになると思う。

(教育長) 第2次教育大綱 3Pには『この大綱が目指す未来とは、池田町に暮らす全ての子どもとおとなの幸せな未来像であり、豊かに発展していく池田町の明るい未来像です。』とある。そのため私は、「子どもがまんなか」というキャッチフレーズにはこのことも含まれていると解釈していけば良いと思う。小澤職務代理者の言葉を借りれば子どもを信じるということ、すなわち「子どもがまんなか」ということは子ども主体で進めていくことであり、町では保小中がそういう思いで取り組んでいると思う。

また5Pにある「保小中15年プランの推進」について大分取り組みを進めているが、先ほどご意見を頂いた「もっと発信に力を入れた方が良い」とか、「皆にわかりやすく記載を改めて欲しい」ということは、6Pにある「池田町全体で「学び合い・育ち合い・支え合う」地域づくり」に関して特にあてはまるのではないかと。特に「①町の未来やまちづくりの課題解決について、子どもとおとなが議論できる環境をつくります」とある点について、今後具体的に考えていく必要があるのではないかと。と思う。

(町長) 大綱では、「子どもは無限の可能性を持っている」と捉えており、しかも多様化してきていると言われている。一辺倒な方向づけは難しい。一人ひとりの個性を大切に伸ばしていく事が大事であると思う。町づくりについて、今までも子ども達からいろいろな意見を頂いたが、今後も意見交換をしながら一緒に町づくりをしていきたいと思う。

(小澤職務代理者) 認定こども園が統合することになり、保育士の報酬額について要望させて頂きたい。町の報酬額が他市町村と比べて高いとは聞いておらず、それが町の認定こども園で働くことのマイナスになっているとしたら改善をお願いしたい。一部の会計年度任用職員の方とお話をした際、仕事は好きだが重労働であるとお聞きした。特に担任を担う場合正規職員の給与になるべく近づけられるように待遇改善をされたい。

(学校保育課長) 全国的に保育士不足と言われているが、報酬額について、町も近隣市町村と比べ高い方ではないが、他の職種の会計年度任用職員との均衡もあり、保育士のみ上げることは難しい。担当部署や理事者と対応を検討していきたい。保育士の方から休暇が欲しいとご意見を頂いたので、その面では夏季休暇を3日から5日に、療養休暇を5日から10日に増やして新年度より対応したい。

(小澤職務代理者) 他の職種との均衡を図らなければならない事はわかるが、正規職員と同じ仕事をしているにもかかわらず待遇に差があるのは何とかならないのかと思う。

(学校保育課長) 保育士の中でも仕事内容により3段階に報酬に差を設けていて、担任が一番高い。ただし正規職員とは大きな差がある。

(小澤職務代理者) 無理を承知で、なるべく正規職員に近づけるようをお願いしたい。

(森泉委員) 部活動の地域移行を進める上で、指導者への手当をきちんとして欲しいがどうなっているのか。

(教育長) ご意見のとおり部活動指導員の確保と手当を支給することは大切で、これを確保しないと地域移行は出来ない。来年度より土日の外部指導者に支給出来るよう検討しているところである。またクラブに移行し教員が指導を担う場合、部活動ならば手当が支給されたところ、クラブになると手当が出されない。これは不合理であるので、国・県に要望していくと同時に町でも出来る限り対応したい。

また私からの要望であるが、本年度小中学校には台湾やマレーシアの学生が交流に訪れた。とても良い交流が出来、各学校とも校長が今後も交流を継続していきたいとの思いがある。台湾の一つの学校は熱烈に交流の継続を希望されており、出来れば今後も行いたい。町のバックアップが無いと続けられない。町長のお考えをお聞きしたい。

(町長) 教育委員の皆様はどうお考えであるか。

(小澤職務代理者) マレーシアや台湾との交流を見ても子ども達は充分対応が出来ていて、周りもサポートしていた。ただ継続するには多額の費用がかかると聞いている。今後どうしていくか町の機関も含めて準備委員会を立ち上げ検討する必要があるのではないかと思う。可能であれば交流の継続を希望する。

(森泉委員) 会染小での交流を見学したが、池田の子ども達は充分に準備をして、交流に臨むことが出来た。ただし突発的に交流に来られると対応が大変なので、年間計画にあらかじめ組み込まれて計画的に交流が続けば良いと思う。

(小林委員) 高瀬中学校のマレーシアからの交流を見学した。良く準備して対応しており、またマレーシアの学生達も書道の授業で良く文字が書けていて、練習をされて来たのでは無いかと思う。グローバルな時代なので、海外の方との交流は行っていった方が良いが、費用面のことはわからないので、可能な限り希望したい。

(町長) 大北地域で海外交流をしていないのは池田だけであり、大変負い目を感じている。小学校では特に事前にオンライン交流をしてあったので、スムーズに迎えることが出来た。交流を今後継続するには充分な準備がいる。具体化出来るように周りと相談していきたい。

(教育長) 本日は町長と教育施策や教育大綱について意見交換をし、共通認識を持つことが出来た。感謝申し上げます。